

## ◆ 花入

花入は大別して金属製のもの、焼き物、竹製のもの、などがあり、使う場合によって考えれば、床の上に置くもの、花釘にかけて使うものなどさまざまな種類がある。

### 【金属製の花入】

- ・ **唐銅** 中国の宋時代の銅器を古銅と呼び、角木（尊式）、鶴首、下蕪などのものや、象耳、鯉耳など耳付古銅花入を珍重し、中興名物「きねの折れ」や利休所持の「つば花入」「桃底花入」「古銅鶴の一声」などのものが有名である。
- ・ 砂張 これは銅とすずの合金で、南蛮砂張、朝鮮砂張などと呼ばれている。利休所持の砂張「ぞろり花入」が有名であるが、他にも舟の形をした釣り花入がある。砂張はその渋い色合いが茶人に好まれたのである。またこれらのほかに、銅と亜鉛の合金でモールと呼ばれる打ち出しの花入や、数は少ないが鉄製の花入などもあり、経筒などもある。

### 【焼き物の花入】

- ・ **青磁** 焼き物の花入では青磁花入を最も格調の高いものとして扱い、中でも中国の青磁は、砧手（宋時代）天竜寺（明初期で色は砧よりも落ち着いている）七官手（明時代のもので釉薬に貫入

がある) 南京手 (前三者に比べて調子は低い) などと呼ばれて特に珍重されている。こうした中国青磁に対して高麗青磁があるが、これは青磁のくすりの中にある、白土象眼による模様のおもしろさに特徴がある。日本でも江戸時代になって、三田青磁 (兵庫県) 瑞芝青磁 (和歌山県) 鍋島青磁 (有田) などが焼かれた。

- ・ **染付** 室町時代以後、中国から伝えられたもので、古染付、祥瑞、呉州と分けられる。古染付とは明時代のものを呼んだもので高砂花入は特に有名である。しかし、明末の祥瑞が染付の頂点とされている。この祥瑞は特に艶麗で、その模様は精細をきわめ、今日にその名品が数々伝えられている。呉州も中国南部での製品であるが、さらに南の安南地方で焼かれたものは安南手と呼び、その絵のにじんだものを「しぼり手」などと呼んで喜んだ。日本の染付は、江戸初期に有田で伊万里焼きとして焼かれ、やがて各地の窯でも焼かれるようになった。

- ・ **赤絵** 赤絵は宋時代から始められ、染付と並んで発達してきた。この上に金彩を焼き付けたものを金襴手と呼び嘉靖年間に最も多く焼かれた。日本でも、赤絵は有田を中心に生まれたが、さらに九谷でも赤絵、色絵、金襴手にすぐれたものがある。

- ・ **その他** わび茶の流行とともに、和物（日本製のもの）で、備前、信楽、伊賀などの土の日による変化や、自然釉のおもしろさが取り上げられた。また、日常生活の雑器な中からも見立てた花入も多い。「うづくまる」「旅枕」「種壺」などがその一例である。

### 【竹の花入】

竹の花入は利休が天正十八年に小田原の陣に従軍したときに、陣中で蕤山の竹を使って花入を作ったのが始まりと言われている。またこれ以前にも、花を贈る送り筒として竹のものがあったと言われる。このときに利休が作った形は、尺八、一重切（銘園城寺）二重切（銘夜長）だと言われている。清竹の清らかさ、竹節のおもしろさ、美しさに着眼したすばらしい意匠である。

このほか、二重切で銘端の坊、登り亀蒔絵の花入などを利休は好んでいる。その後、元伯の丸太舟、江岑の長生丸（舟）覚々斎好みの置き筒、巻水蒔絵置き筒、如心斎好みの丸太舟、太鼓舟、置き筒、火吹き竹、初霜、稲塚、置き尺八、卒啄斎好みの峠、山道、苦の雫、櫂の雫、碌々斎好みの鶴首などがある。

### 【籠花入】

籠花入は精巧な編み方と、端正さを誇る唐物が最も喜ばれたが、

中国の竹は日本の竹よりも細工物に適しているところから非常に精密な物が多い。これにも利休は、桂籠のように漁夫の持つびくや、農夫の持つ鉈籠をみたてて、草庵の茶にふさわしい花入を取り上げている。なおこのほかにも、利休が好んであませたという、小さな楓籠もある。久田宗全は自分で籠を編んだと言われ、掛け置き籠、手付き置き籠、蟬籠などが伝えられている。そのほかにも、代々の宗匠によって数多くの籠花入ができています。碌々斎好みの大津籠や、惺斎好みの大原籠、江ノ島のさざえ籠、別府籠などがあげられる。特殊な物としては、利休好みのふくべ花入がある。